



「佐々木さんを支援する会」会報

ウブムエ

事務局 〒235-0041横浜市磯子区栗木1-22-3/TEL 045-774-9861洋光台
バプテスト教会内(蛭川明男牧師) / ●世話人代表 金子 敬
●事務局長 吉高 叶 (栗ヶ沢バプテスト教会 TEL 047-341-9459)

ニャルワンダ語で「ウブムエ」(ubumwe)とは、「一致」「調和」「和」を意味する。

夢を描いています！

真の平和と和解のために必要なプログラムを
彼・彼女らといっしょに構想していきたい。
わたしは、夢を描いています。

佐々木和之

ささき かずゆき

東日本大震災から2ヶ月以上が経ちましたが、支援会の皆さまはいかがお過ごしでしょうか。皆さまの中にも、地震・津波の被災や原発事故による避難生活を続けておられる方々、また、そのようなご親族やご友人をお持ちの方々がおられることでしょうか。あるいはご親族やご友人を亡くされた方々もおられるかと存じます。心からお悔やみとお見舞いを申し上げます。

今年は丁度ジェノサイドの記念週(4月7日から13日)がキリストの受難節と重なりました。そして、その期間が同時に、大震災と原発事故のために不安、疲労、悲しみのどん底におられる方々、さらには、アフリカや中東の国々で暴力紛争や政府の弾圧により血を流し、家族を失い、逃げ惑っている方々のことを思い、祈るときとなりました。私たちが参加した4月10日のジェノサイド記念礼拝では、「虐殺で家族を殺された人々、日本の地震と津波により家族を失った人々、原発事故で故郷を追われた人々、流血が続くアイボリーコーストの人々のことを思います。受難節にあって、私たちはこれら

の全ての人々と共に悲しみ、嘆き、喪に服します」、との祈りが献げられていました。日本から遠く離れていることにもどかしさを感じることも度々ありますが、ルワンダの友人たちと共に、日本の皆さまのことを覚えて祈っています。

ところで、私が家族と共にルワンダに渡ってもうすぐ6年になります。今日まで「支援する会」(一期3年)の第一期と第二期の活動のためにご支援下さった皆さまに心より感謝いたします。ご存知のように、私はこれまでリーチ(Reconciliation Evangelism And Christian Healing/REACH)の仲間たちと共に、ジェノサイドや内戦により傷ついた人々の心の癒しと和解のために働いてきました。あっといふ間の6年間でしたが、今あらためて、暴力紛争後の和解と平和構築には、現地の複雑な状況を理解した上でなされる、長期的な支援が必要であることを感じています。これまでに築いてきた現地の方々との信頼関係をベースに、私はこれからもルワンダで活動を継続していく所存です。どうか「支援する会」第三期も、

皆さまのお祈りとご支援をよろしくお願ひいたします。

以下、第三期の初めにあたり、私が今後ルワンダで進めていきたいと考えている活動の柱を皆さまにお伝えいたします。

★次代を担う若者の育成

まず、ルワンダの次代を担う若者たちの育成に尽力します。前号でお伝えしましたように、私は今年からルワンダのプロテストタント諸教派が協力して設立した大学であるProtestant Institute of Arts and Social Sciences (以下、PIASS/ピアス)の教員とリーチの職員、という二足の草鞋を履いて活動を続けています。ピアスで働くことを決断した理由は、ルワンダで最初の平和学関連学科となる平和・紛争研究学科 (Department of Peace and Conflict Studies) の創設という、大変意義のあるプロジェクトへの協力を要請され、これこそ「次代を担うリーダー育成」に取り組むうってつけの現場だと判断したからです。

まずは新学科設立に向けて、カリキュラムの作成、講師陣の確保、広報活動等の課題に取り組んでいくことになりますが、その後は、**1)** 平和構築、修復的正義と和解、非暴力社会変革等の講義、**2)** リーチをはじめとするNGOの和解と共生プロジェクトの実践から学ぶフィールドワーク、**3)** 学生たち相互の関係構築を支援するプログラムに取り組んでいきたいと思っています。

ピアスはキリスト教超教派の大学ですから、様々な教派に所属する学生たちが集まってきます。その中には、ジェノサイドで親族を失ったツチの学生たちもいれば、隣国コンゴで難民生活を強いられていた当時、現ルワンダ政権側の攻撃により親族を失ったツツの学生たちも含まれます。将来それぞれの教派で指導的立場を占めることになる彼・彼女らが共に学び、リーチの現場で和解と共生への道を歩んでいる人々とフィールドワークで

共に出会い、学生寮で寝食を共にし、そして、共に聖書を学び祈る。私は、このような学びと関係構築の場を創り出しつつ、真の平和と和解のために必要なプログラムを彼・彼女らと共に構想していきたい、との夢を描いています。

★「償いの家造り」から協働プロジェクトへ

リーチの仲間たちと一緒に東部州キレヘ郡で取り組んできた「償いのプロジェクト」も今年で4年目に入りました。今号でも後ほど報告させていただきますが、当初は「公益労働刑の受刑者による家造り」であったプロジェクトが、2009年8月以降、「元受刑者がボランティアとして取り組む家造り」へと展開し、現在に至っています。この元受刑者によるボランティアとしての家造りは、彼らの希望により、今後少なくとも数ヶ月は続く見込みですが、私は今、キレヘ郡では「償いのプロジェクト」が徐々にその役割を終え、癒しと和解のプロセスの次のステージに踏み出す時が来ていると感じています。そのステージとは、「償いのプロジェクト」の参加者たちが、「加害者」と「被害者」としての立場の違いを超え、神による和解の働きの中で「新しく造られた者」(新約聖書 コリント人への第二の手紙5章17節)として、貧困削減という共通の目的のために協働しつつ、和解と共生のメッセージを発信していくプロジェクトです。

直接の被害者と加害者が参加する協働プロジェクトの実施は、数年前には想像すら出来ないことでした。しかし今は、このようなプロジェクトを志向する人々がジェノサイドの加害者の中にも被害者の中にも生まれているのです。この協働プロジェクトへの移行を、現地の状況を見極めながら、今後半年から1年以内を実現したいと願っています。

また、「償いのプロジェクト」の他地域での展開、さらには、これまでプロジ

エクトの実施を通して学んできたことを、他のNGOや政府機関と共有していくことも大きな課題として考えています。幸い、先月から、ルワンダ政府がジェノサイドの加害者に科している「公益労働刑」に関する共同研究を、ルワンダ人の同僚と始めることが出来ました。重大犯罪の加害者に公益労働刑を適用するのはルワンダが世界で初めてのケースです。修復的正義のシステムとして機能する可能性を持つ重要な政策ですので、よりよい形で実施されていくように、研究の成果をもとに政策提言を積極的に行っていきたいと思っています。

★ルワンダとアジアの若者を繋ぐ

平和構築や和解というテーマに関心を持つルワンダと日本、そして、他のアジア諸国の若者たちを繋ぐプログラムの開始に向けて歩み出します。ここ数年、暴力紛争後の平和構築や和解に関心を持つ日本人の学生たちが数多くルワンダを訪れますが、私はこれまで時間の許す限り、その若者たちが草の根の和解の現場を体験するお手伝いをしてきました。今後は、彼・彼女らがピアスで学ぶルワンダ人の若者たちやリーチの活動に参加する若者たちと交流し、共に平和と和解について語り・学び合うプログラムを、日本の大学、NGO、教会とも協力しながら企画していきたいと思っています。

とても嬉しいことに、既にピアスは、韓国のキリスト教系の大学や教会との協力関係の構築に向けて具体的な協議を開始しました。現在、常勤の外国人教員はスイス人2名、カメルーン人1名、日本人1名のみですが、近い将来、韓国人の教員が加わることが予想されます。韓国の方々と協力し、日韓の若者たちがルワンダで出会い、現地の若者たちからチャレンジを受けながら、自分たちの間に横たわる問題・課題について見つめ・話し合う研修プログラム（例えば数週間の夏期もしくは冬期研修）がやがて実現する

ことになるかもしれません。今年私が一時帰国する際には、特に平和研究の分野で実績のある大学を訪問し、具体的な協力関係の可能性を探りたいと思います。

先ほど私は、リーチの仕事とピアスの仕事を「二足の草鞋」と表現しましたが、実際には、私がこれから取り組んでいく「平和と和解のプロジェクト」の「両輪」であることがお分かりいただけたでしょうか。これからも、精一杯に活動を進めていきますので、お祈りとご支援をよろしくお願いいたします。

活 動 報 告

■「償いの家造り」新築祝いのご報告

前号の「続く和解への歩み」という記事で、虐殺の生存被害者であるサベリアナさんの家が完成に近づき、間もなくそのお祝いが行われる予定であることをお伝えしました。既にブログ等でお伝えしましたが、改めてその「新築祝い」のご報告をさせていただきます。

新築祝いがあった12月23日のルガンド村は快晴。空き地に立っている数本の木の幹にナイロンシートを括り付けて屋根にし、近隣の家庭から借りてきたベンチを並べただけの特設会場に、250名もの人々が集いました。

サベリアナさんが通うカトリック教会の司祭による新居祝福式とREACHのフィデル牧師のメッセージの後、タデヨさんが立ち上がり、サベリアナさんの方を向いて謝罪の言葉を語りました。

「サベリアナさん、私は今日、ジェノサイドの時に犯した罪を悔い、あなたに赦しを乞います。私は襲撃グループに加わり、あなたの家族を殺害し、あなた自身の体にも深い傷を負わせました。その時のことを私は忘れたことはありません。そう告白した後、タデヨさんは償いの思いを込めて家造りに取り組み、そのおかげでようやく彼女の前に「進み出る勇氣

を得ることができた」、と言いました。そして、スピーチの最後に、「私は、今後決してあなたの障害になることはありません。あなたが直面する問題を解決するために力を尽くしていくことを誓います」、と宣言したのです。

被害者であるサベリアナさんに対し、また、自分の妻や子どもたちの前で、自分が殺人者であることを認めるのにはどれだけの勇気がいったことでしょうか。以前、サベリアナさんが彼の謝罪を待っていると私が彼に伝えたとき、「家が完成し、彼女が入居する日にきちんと謝罪したいと思っている。言葉だけでは軽すぎるから」、と言っていたタデヨさん。犯行時から17年を経て、ようやく真摯な謝罪を成し遂げたのです。

その後、サベリアナさんが立ち上がりました。彼女は会衆の方を向き、良く通る声で堂々と語りはじめました。彼女はまず、大虐殺を「神の力ゆえに」生き残って以来、どれだけ加害者からの謝罪の言葉を待ち続けていたかについて話しました。そして、タデヨさんの方を向いてこのように語りかけたのです。

「タデヨさん、あなたの告白により心が安らぎました。あなたも心安らかに歩んでください。どうか重荷を下ろしてください。これからは、隣人として関わり合っていきましょう。．．．私はあなたの前に立っていますが、どうか怖がらないでください。私、サベリアナ・ムカガタレは、あなたを赦します」。



●祝福を受けるお二人●

彼女が「あなたを赦します」と言い終えると同時に、会衆から大きな拍手が巻き起こりました。そして、沢山の人が前に進み出て、2人に祝福の言葉をかけました。私もその人々の列に加わり、「おめでとう」と声をかけ、抱擁を交わしました。



●和解を成し遂げたお二人●

スピーチをしていたときのサベリアナさんはとても堂々としていて、彼女の言葉はタデヨさんへの思いやりに満ちていました。彼女は、自分を苦しみのどん底に突き落とした張本人であるタデヨさんのことを思いやれるまでに憎しみを克服し、癒されたのです。

彼女が選び取った赦しと和解の道は、これからもきっと険しいものであり続けることでしょうか。それはまさに「十字架の道」、と言えるかもしれません。集団的暴力であるジェノサイドの生存被害者である彼女には、加害者はタデヨさん1人だけではなく、まだ謝罪していない加害者が多数いるのですから。しかし私は、彼女がタデヨさんから「償いの家」と謝罪を受け取り、彼への赦しを会衆の前で宣言したことが、彼女の人生にとって決定的な意味を持つ出来事であったと思います。そのことによって、彼女はかつて奪われた尊厳を回復したのです。もう誰にもその尊厳を奪うことはできないのです。そして、その彼女が歩み始めた「十字架の道」を、平和と和解の主であるイエス・キリスト（聖書 エフェソの信徒への手紙 2章14～18節）が、これからも

共に歩んでくださると、私は信じています。

タデヨさんとサベリアナさんのスピーチは、取材に来ていたFMラジオ局の番組で当日から数週間繰り返し放送されました。驚くべき赦しと和解のメッセージを多くのルワンダの人々と分かち合うことができたことをとても嬉しく思います。

■初めて見た笑顔と涙

既にお伝えしているように、元受刑者によるボランティアの「償いの家造り」は、キレヘ郡の他の村でも進められてきました。ルワンヘル村もその1つ。3月16日、3つの家の改築が完了したということで、この村でもお祝いの集まりがありました。参加者は450名。その日も、集会のハイライトは家造りに参加した加害者による謝罪と家を建ててもらった被害者による応答のスピーチでした。

その日の集会で特に心を打たれたことをお伝えします。それは、家を改築してもらった被害者の1人のトマスさんと、彼の家族を殺害したセルディオさんのことです。トマスさんは20代後半の若者ですが、ジェノサイドで虐殺孤児となりました。それ以来、彼は4月の虐殺犠牲者の追悼期間になると、毎年毎年、彼の家のすぐ近くにある共同墓地で野宿をするのだということです。そこは、彼の両親と兄弟姉妹が葬られた場所なのでした。



●改築祝いに集まった人々●

昨年12月に知り合ってからというもの、彼は会う度にいつも虚ろな表情で、精気

といったものを全く感じさせない青年でした。その彼が、その日はとても穏やかで優しい表情であったこと、そして、短いスピーチではありましたが、はっきりと感謝と赦しの言葉を述べたことに私は胸がいっぱいになりました。彼は、「私の家族は皆あの墓で眠っています。家族を殺した者たちの1人、セルディオさんを私は赦しました」、と会衆に向かって言ったのです。

その時、私は、トマスさんの5メートルほど左に座っていたセルディオさんが、顔をくしゃくしゃにして泣いているのを目撃しました。彼もタデヨさんのように、今から17年前、ツチの家族を次々と襲撃したフツの村人たちのリーダー格の1人だったのです。彼は、公益労働刑として行われていた「償いの家造り」に参加し、刑期を終えた後は、ルワンヘル村のプロジェクトOBたちのまとめ役として、これまで虐殺の生存被害者である3家族のために改築工事を手がけてきたのでした。私を最初にトマスさんの所に連れて行ってくれたのも彼でした。いつもはどちらかというところ、ポーカーフエースで通している彼が、人目をはばかることなく泣いていたのです。



●トマスさんと私●



●トマスさんからバスケットの贈り物●



●セルディヨさん●



●改築祝いのひとコマ●

これまで、サベリアナさんやタデヨさんたちのために、また、その他の「償いの家造り」に関わる人々のためにお祈りくださった皆さま、本当にありがとうございました。新築・改築祝いの場で、皆さまの祈りのサポートについて、集われていた全ての人々に伝えました。これからも「償いの家造り」は続きます。どうか今後ともお祈りとご支援をよろしく願いたします。

■ピアスでの働きがスタート！

冒頭でもご紹介した、ピアス (Protestant Institute of Arts and Social Sciences / PIASS) での働きが1月下旬に始まりました。ピアスは開校2年目の新設大学ですが、その前身であるプロテスタント神学校(現在の神学部)は40年の歴史を誇り、ルワンダでプロテスタント神学の学位を取得できる唯一の高等教育機関として多くの人材を輩出してきました。現在は教育学部、開発学部、神学部の3学部があり、学生数は326名です。教育学部

と開発学部は、夜間コースと週末コースの学生たち、神学部は一般コース(昼間)と夜間コースの学生たちです。私は開発学部の専任教員として複数の講義を担当しながら、開発学部の1学科である平和・紛争研究学科の来年度創設に向け、カリキュラム作成等、重要な働きを担わせていただきます。

ピアスでの勤務はかなり過酷です。その理由は、講義が長時間の集中講義形式で行われることです。私が最初に担当したりサーチ方法論の講義は、夜間コースと週末コース(開発学部・教育学部のみ)の新入生各53名を対象にした講義でしたが、講義がある週のスケジュールは、夜間コースの学生たちに3夜連続で午後5時半から9時まで講義をし、週末コースの学生たちには、土曜日の朝8時半から12時までと午後2時から5時半まで講義をするといった具合です。特に土曜日の講義を終えるころには、いつもガス欠寸前の状態になりますが、学生たちの熱意に励まされて頑張っています。

学生たちの年齢層は18才から50才代までとかなり幅広く、男女比はほぼ男性6割：女性4割。大半の学生たちが、昼間は教会、政府機関、NGO等で働いている人たちです。ピアスの学生たちは、生真面目さと集中力という点では抜群です。講義を受ける夜間や週末には仕事のためにかなり疲れている学生たちもいます。また、ルワンダの大多数の中学・高校では、つい2年前までフランス語で授業が行われていたため、英語が得意でない学生たちが少なくありません。そんな彼・彼女らが、英語での講義の内容を必死に理解しようとしてこちらに眼差しを向け続けている姿はとても感動的です。

間もなく、「戦略的組織分析」に関する講義を開発学部と教育学部の2年生を対象に始めることになっています。しばらくはアメリカの開発学修士課程での学びと国際NGO在職当時の経験をベースにした講義が続きますが、平和・紛争研究学

科が設立された後、ルワンダの平和構築や和解について学生たちと共に学び語り合う日の来るのが今から楽しみです。



●夜間コースの学生たち●



●週末コース、
キャンパスでディスカッション●

■終わりに

4月24日、イースター礼拝の後、恵と一緒に友人のグロリオサを訪ねました。彼女は、私にとってルワンダで最も古い友人の1人ですが、ジェノサイドで両親を含む多くの肉親を失った虐殺の生存被害者です。彼女と出会ったのは、今から11年前、私が初めてルワンダを訪れた時のことです。ブラッドフォード大学平和学部への留学を数ヶ月後に控えていた私でしたが、NGOによる平和構築プロジェクトを視察するため、その時勤務していたエチオピアからルワンダを訪ねたのでした。彼女はその時、ある国際NGOで自ら立ち上げた平和構築プロジェクトの担当職員として働いていました。ジェノサイドからまだ6年後のことでした。

突然事務所を訪れた私に、彼女は仕事のことばかりでなく、虐殺の生存被害者としての個人的な体験まで長時間に渡って話してくれました。私は、被害者の立場でありながら、彼女が「憎しみと暴力の連鎖を断ち切るために」平和と和解のプロジェクトを立ち上げた、と語ったことに衝撃を受けました。ジェノサイドで受けた傷から未だに癒されていない彼女が、「困難だがいつか実現する和解」という希望を語るのを目撃したのです。

イースターの午後、私と恵が彼女の自宅を訪ねると、彼女は感極まった表情で私たちを迎え入れ、「ここ数日あなたたちのことを考えていたところだった。でも、電話をしそびれてごめんなさい」と言いました。震災のことで、私たちのことを気遣ってくれていたのです。そして、実は前日からとても落ち込みが激しかったと明かしました。おそらくジェノサイド当時のことを思い起こし、心身の調子を崩していたのでしょう。その彼女が、別れしなに「訪ねてくれて本当に有難う。あなたたちのおかげで、私の魂が蘇った」、との言葉をかけてくれました。実は私も、ジェノサイド記念週以降はしばらく落ち込みがちになるのですが、その時、彼女の言葉がそんな私を癒してくれたのでした。

ルワンダで17年前に起きたあの出来事を、心で初めて受けとめたのは、彼女と出会った11年前のあの日でした。その翌年、私は博士論文のテーマを「ルワンダ大虐殺後の正義と和解」に絞り、現地調査のために年に何回もこの国に足を運ぶようになりました。その調査期間中、現地の人たちから「この調査が私たちにとって何のためになるのか？」という質問を繰り返し受けました。その度に私は、「この調査の後、平和と和解のために活動を立ち上げたいと思っている。ルワンダの状況をよく理解するために、皆さんの話を聞かせて欲しい」と言い続けました。それに応えて、多くの人たちが、大

虐殺や内戦当時の凄惨な体験、悲しみ、怒り、やりきれない思い、そして希望について語ってくれたのでした。その時聴き取った沢山の「悲しみの物語」とほんのわずかの「希望の物語」が今の私の原点です。そして、癒しと和解のミニストリーの現場で働くようになってからも、ルワンダの人々の物語を聴き取り続けているわけですが、その中で、「悲しみの物語」は決して無くなってはいないけれ

ども、それらの物語の中に「希望の物語」が紡ぎ込まれていることに気付くことがあります。そして、それらの物語は、今や私自身が生きるうえで欠くことの出来ない「希望の物語」になりました。これからも人々の物語を聴き取り、紡ぎ、皆さまと分かち合っていきたいと願っています。(5月26日記)

●事務局からお知らせ

東日本大震災によってお亡くなりになった方々を悼み、主の慈しみの御手の中に、お一人ひとりの尊い命をお委ねいたします。また、未だに過酷な避難(所)生活を強いられている大勢の方々に、解放と再生への道のりが一日も早く示されますようにお祈りします。そして、福島第一原発の危機的状況が一刻も早く収束し、すべての被造物が「和解の主」のもとで、新しく結び直される道が拓かれますように。

ルワンダでの佐々木和之・恵さんご夫妻の働きも、4月から第三期(一期3年)に入りました。「支援する会の皆さま」のご支援とご加禱に心より感謝申し上げます。

そして、これからもどうぞよろしくお願いいたします。

新たに入会して下さった方々

2010年12月1日～2011年5月31日

板橋一郎、今泉英昭、加藤真規子、高椋博子、玉崎麻利江、玉舎亮太郎、前田豊、武藤小枝里、市川大野キリスト教会、札幌バプテスト教会少年少女会、聖書を読む会(斉藤様方)、善隣バプテスト教会、田隅バプテスト教会、平塚バプテスト教会、日本キリスト教団上大岡教会、日本同盟キリスト教団麻布霞町教会教会学校、若松バプテスト教会女性会、

(敬称略)

ありがとうございました!!

●郵便振替口座 00250-0-112907 佐々木さんを支援する会●

- 事務作業を簡素化するため、すべての支援者に一律に「振替用紙」を同封させていただいています。請求ではありませんのでご了承ください。必要な方はご利用ください。
- なお、「郵便自動引き落とし」をご利用いただけます。ご連絡いただければ、所定の申込用紙を送らせていただきます。洋光台教会・蛭川まで。(電話045-774-9861)
- 佐々木さんを支援する会HP(ホームページ)

<http://rwanda-wakai.net/>

佐々木さんの活動報告、写真館、等。

佐々木和之さん、恵さんのブログも適時更新しています。

- 世話人会 金子 敬(古賀教会牧師)、蛭川明男(洋光台教会牧師)、村上千代(日本バプテスト女性連合幹事)、吉高 叶(栗ヶ沢教会牧師)